

第1章 米子市の概要

1 自然・地理的環境

(1) 気候・気象

米子市は、鳥取県西部に位置しており、北は日本海的美保湾、西は中海に面し、東南部は中国山地の秀峰大山の山麓の一部をなしています。

気候は、日本海型の気候で、春から秋は好天の日が多く、冬は曇りや雪、雨の日が多くなります。年平均気温は 15.0℃と比較的温暖な地域です。夏は暑く、初夏の比較的早い時期に南風でフェーン現象が発生すると真夏日や猛暑日となることがあります。冬は、降雪地帯ではあるものの、県東部の鳥取市と比べると降雪量は半分ほどで、過去最深積雪は、平成 23 年(2011)1 月 1 日に記録した 89cm です。また、年最低気温の平均値は 0℃を上回りそれほど低くないため、凍結状態が続き根雪になることもほとんどありません。

(2) 地形・地質

市域の地形は、大きく分けて中国山地から流れる日野川下流域の両岸に広がる沖積平野の米子平野・淀江平野と、それを取り囲む丘陵部に大別されます。さらに、その北側には幅約 4 km、長さ約 17 kmの弓ヶ浜半島の砂洲低地が形成されています。

丘陵部は、中国山地から続く丘陵性山地と、大山火山に起因する火山性台地で構成されます。中国山地の主脈から北方の日本海に向かって延びる支脈は、北にいくほど標高が下がり、米子市の南方で沖積平野の下に埋没します。この丘陵性山地は標高 100m以下で日野川・法勝寺川・伯太川等の河川で分断されています。

大山火山に起因する火山性台地は、大山から西に向かって高度を下げて平野に埋没します。その西端に台地が広がっています。市域の南方には、南部町周辺に分布する古第三紀の花崗岩類や鮮新世の玄武岩類からできた山塊がありますが、市域の山塊は基本的には第三紀の法勝寺火砕岩層と米子流紋岩層から構成されています。

水系は中国山地の水を集める日野川と支流の法勝寺川が主な河川です。日野川は、中国山地に源を発する一級河川で、大山の西麓を日本海に向かって北流し、米子市と日吉津村の境で日本海に注ぎます。中心市街地を流れる加茂川は自然河川ですが、新加茂川は洪水調節のために掘削された人工河川です。

平野の少ない山陰地方では、米子平野は鳥取、出雲平野等と並ぶ大きな平野です。日野



米子市概要図



米子市周辺の地形図

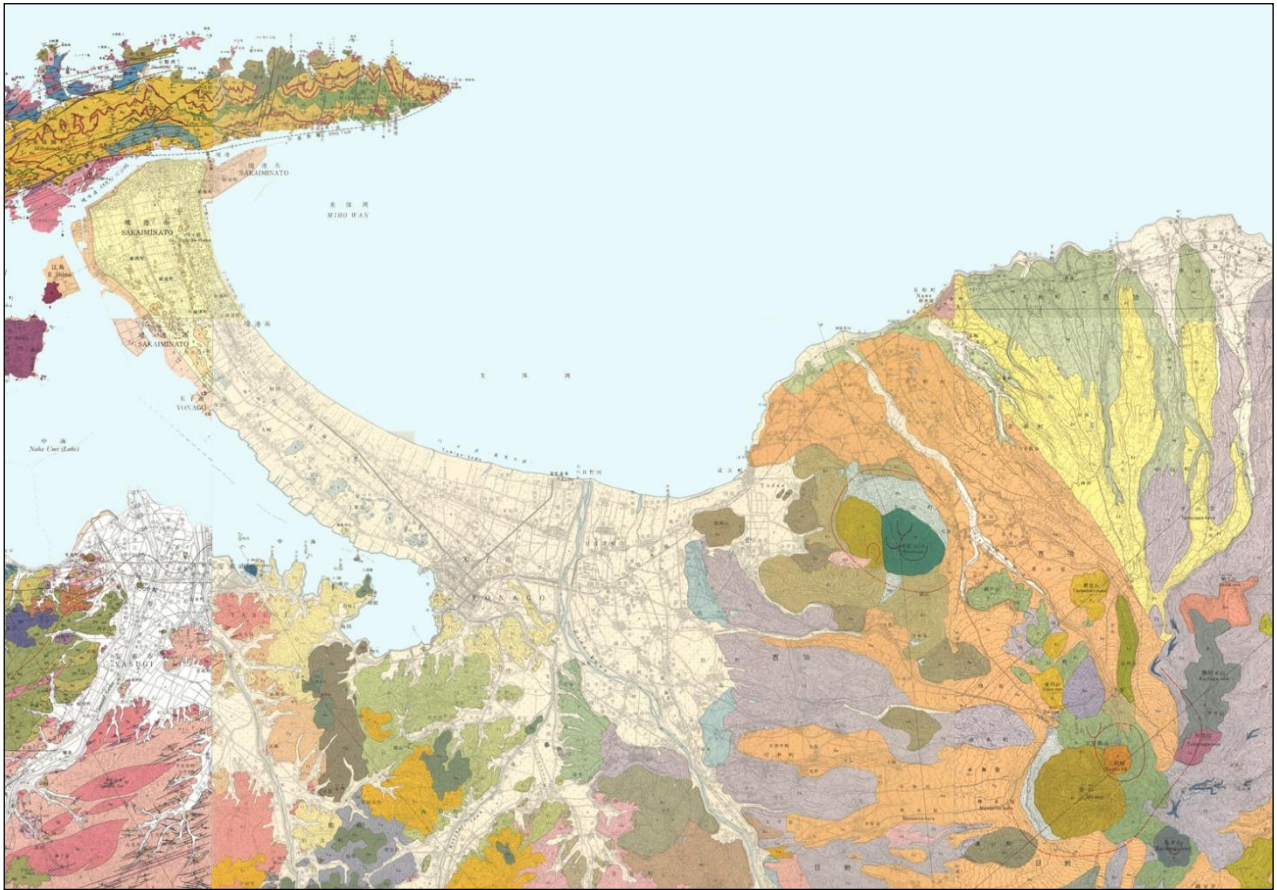
川・法勝寺川などによって形成された扇状地性の沖積平野で、旧地形が河川堆積物の多量の土砂で覆われて現在の地形を形成しています。また法勝寺川の谷底平野には法勝寺川低地が広がっています。米子低地は市街地の大部分が相当します。米子流紋岩の山地によって日野川の扇状地と沿岸流による砂州形成とも遮られた地域で、海拔4m以下の低湿な土地が多く、北側には砂州が広がります。

弓ヶ浜半島は、飯梨川や日野川からもたらされた砂が、島根半島を迂回する対馬海流の分岐沿岸流等によって運搬堆積し形成されたもので、日本最大級の砂州です。南縁は丘陵によって遮られています。砂州にはその長軸方向に沿って内浜・中浜・外浜の3列の砂丘列が発達しています。このうち古く形成された内浜砂州が幅も長さも最も大きく、境港市外江町まで達しています。内浜砂州はクロスナが形成されており、縄文時代後期の遺跡も確認されています。クロスナ層はかつての表土が埋没したものと考えられ、有機物による黒色を呈しています。その上に新しい砂層（シロスナ）が発達しています。日本海側から米子市周辺を眺めると、西側には弓ヶ浜砂州が広がり、南方には大山とその前方に孝霊山がそびえ、古くから海上交通の目印となっていました。

海域は中海と美保湾で、米子市の北西には汽水域である中海が形成されています。中海は、西側は松江市の大橋川を通じて宍道湖に繋がり、東側は弓ヶ浜半島によって区切られていますが、北部で境水道によって日本海に通じています。中世以降の砂州の発達により砂丘地が形成されて美保湾と遮断されたもので、それ以前は、砂州が島状に点在し、その間は海峡状を呈して中海と美保湾が直接通じていたと考えられています。

(3) 植生

日本海多雪気候区のもとにあつておおむね温暖気候区にまとめることができる市域の植生は、本来スダジイ・シラカシ等の常緑広葉樹による暖温帯照葉樹林が優占して分布しています。また、標高のやや高い大山山麓や島根県側の南西山地には、冷温帯系の一部混生も見られますが、このような照葉樹林は人為的影響により失われ、現在は神社・寺院の林や丘陵地等に残るのみとなっています。



米子市周辺の地質図

地質図凡例

現世	r	埋立地	Tb	凝灰角礫岩	F	両輝石含有閃石黒雲母安山岩	Jr	流紋岩熔岩・貫入岩
	a	礫・砂および粘土	Mf	火山岩塊および火山礫	Su	紫蘇輝石黒雲母角閃石安山岩	Ja	安山岩熔岩・火砕岩
	c	砂	Na	火山岩塊・火山礫および火山灰	Sj	両輝石含有黒雲母角閃石安山岩	Ja	安山岩貫入岩
	s	砂	l	粘土	N	両輝石含有黒雲母角閃石安山岩	Jm	黒色泥岩
第四紀(完新世)	v	礫・砂および泥	S	角閃石黒雲母安山岩	K	両輝石含有黒雲母角閃石安山岩	Ko	砂岩・礫岩および泥質岩
	s	礫および砂	M	紫蘇輝石含有黒雲母角閃石安山岩	G	紫蘇輝石含有黒雲母角閃石安山岩	tu-l	酸性軽石凝灰岩
	b	砂・礫および泥	P ₁	紫蘇輝石含有黒雲母角閃石安山岩	I	角閃石黒雲母安山岩	Ka	安山岩火砕岩
	d	アルカリかんらん石玄武岩	P ₂	普通輝石含有紫蘇輝石黒雲母角閃石安山岩	Aa	無斑晶安山岩		安山岩および流紋岩
第四紀(更新世)	n	デイサイト火砕物	P ₃	両輝石含有閃石黒雲母角閃石安山岩	B	安山岩	Os	安山岩熔岩および凝灰角礫岩
	m	礫および砂	L ₁	角閃石含有輝石安山岩	B	石英閃緑岩・ドレライト・ひん岩・玄武岩・安山岩	Op	安山岩火山礫凝灰岩
	sg	礫および砂	L ₂	両輝石安山岩	Ka	安山岩熔岩及び火砕岩	Tr	流紋岩熔岩(凝灰角礫岩を伴なう)
	lm	ローム	Ya	両輝石黒雲母角閃石安山岩	Kd	デイサイト軽石凝灰岩	Tl	流紋岩凝灰角礫岩および火山礫凝灰岩(熔岩を伴なう)
	s	礫および砂	K	両輝石安山岩	Ko	砂岩・礫岩・安山岩・デイサイト火砕岩・泥岩及びシルト岩	Tr	流紋岩凝灰角礫岩
	f	礫・砂および軽石	Sa	両輝石安山岩	Km	泥岩・シルト岩及び礫岩互層	Tt	流紋岩凝灰岩および火山礫凝灰岩(泥岩を挟む)
	Na	火山岩塊・火山礫および火山灰	Sk	両輝石安山岩	Kp	流紋岩火砕岩(流紋岩熔岩を伴う)	Ta	花崗岩砂岩(凝灰岩を伴なう)
	Pf	軽石・火山礫および火山灰	Yo	紫蘇輝石黒雲母角閃石安山岩	Kr	流紋岩熔岩及び貫入岩(流紋岩火砕岩を伴う)		
	M	礫および砂	Tb	凝灰角礫岩(黒雲母角閃石安山岩熔岩を挟む)	Ja	安山岩熔岩及び火砕岩	F	細・中粒黒雲母花崗岩
	l	粘土・砂および礫	Dd	アルカリ玄武岩溶岩	Jp	流紋岩火砕岩及び溶岩(泥質岩を挟む)	Sa	細粒(白雲母含有)黒雲母花崗岩
	W	火山岩塊・火山礫および火山灰	Thz	礫・砂及び泥	Jr	流紋岩熔岩熔岩及び火砕岩(貫入相を含む)		
	第三紀(中新世)	W	火山岩塊・火山礫および火山灰			Jm	黒色泥岩・シルト岩及び頁岩(流紋岩凝灰岩を挟む)	
W		火山岩塊・火山礫および火山灰			Ha	安山岩溶岩	Gd	優白質黒雲母花崗岩
		紫蘇輝石含有黒雲母角閃石安山岩			Hc	火山岩層堆積物(安山岩石質火山礫凝灰岩-凝灰岩を伴う)	Cf	細粒両雲母花崗岩
		紫蘇輝石含有黒雲母角閃石安山岩			Hd	デイサイト軽石火山礫凝灰岩-凝灰岩	Gb	粗～中粒黒雲母花崗岩
		普通輝石含有紫蘇輝石粗面玄武岩			Od	デイサイト溶岩及び貫入岩	Op	花崗斑岩
		撒攪石粗面玄武岩(火山礫凝灰岩を伴なう)			Fc	礫岩(砂岩を挟む)	Ga	アブライト質黒雲母花崗岩
							Gh	角閃石黒雲母花崗岩
							Gd	角閃石石英閃緑岩
第三紀(鮮新世)								
古第三紀								
白堊紀								
未詳								

現況では、南西部島根県境寄りや東部の大山山麓はアカマツ林・コナラ林となり、市街地に近い愛宕町・陰田町などでは植林されたスギ・ヒノキ林が多くを占めています。竹林はモウソウチク・マダケ林が山地の麓や集落の周縁に分布しています。市内には広い草原はありませんが、干拓地、海辺、河川の土手等に、これに相当する植物群落がみられます。

また、日野川の河川敷や中海沿岸等の水辺には、ヤナギ類やヨシ・ツルヨシ等を主とした湿地性の植生が見られます。いずれも帰化植物の割合が高い傾向にあります。

弓ヶ浜砂州の外浜海岸は細長い砂丘地となっており、防潮、飛砂防備のためのクロマツ林とハマゴウ、コウボウムギ等の砂丘植生が見られます。

(4) 動物相

南部の丘陵性山地では島状に発達した里山林、北西部の弓浜部では海岸林で占められます。このような生息環境から陸生動物については、低山性の落葉広葉樹林及び照葉樹林等の里山環境に依存する中・小型哺乳類、爬虫類、両生類が比較的多い特徴があります。

市域に生息している哺乳類のうち、小型哺乳類の生息分布域は市内のほぼ全域にわたっています。これに対して中・大型哺乳類の分布域は、大山山麓とつながる日野川東部地域と、中国山地とつながりを持つ南西部地域の2つに大きく分けられます。日野川東部の地域ではホンドギツネ・ホンドテンが、南西地域ではニホンザル・ニホンイノシシ・ホンドジカがよく姿を見せます。

爬虫類の多くは水田地帯・山林域に生息しています。しかし、市街化によりその生息域は減少しています。また両生類はカエル類を中心に特別天然記念物オオサンショウウオ等も確認されています。これらの多くは市内周辺部の里山環境に依存した種類で占められ、大山裾野に連なる日野川右岸域および島根県境地域で多く確認されています。

鳥類については、大山、日野川、日本海、中海等の自然環境の多様性に大きく関わりがあります。分布状況は南西から北西の中海最深部の鳥類、市中央部の都市鳥、南東部の村落耕地、林地型、北部の海型鳥類に類別されます。特に中海沿岸部については、水鳥の集団渡来地として優れており、繁殖地と越冬地を行き来する鳥類にとって大切な地域であり、学術的にも極めて貴重な地域として、ラムサール条約に登録されています。特に冬鳥については、位置的關係から朝鮮半島を経由して多種の鳥類が渡来してきます。また、近年は田園地帯を中心に兵庫県で人工飼育・放鳥された特別天然記念物コウノトリの飛来も確認されています。



ラムサール条約湿地(米子水鳥公園)

2 社会的状況

(1) 米子市の市勢

米子市は、鳥取県の西端、山陰のほぼ中央に位置し、北西部で境港市、西部で島根県安来市、南部で南部町、伯耆町、東部で大山町、市域の北東部に日吉津村を囲い込んでいます。

市域は東西 21.2 km、南北 13.8 km、総面積は 132.42 km²で鳥取県全体の約 3.8%にあたります。



鳥取県の位置



米子市の位置

人口は、鳥取市に次ぐ県内第 2 位の 145,890 人（令和 5（2023）年 2 月 28 日現在の住民基本台帳）です。鳥取県西部圏域の中心都市として位置付けられ、近隣の境港市・安来市・松江市・出雲市の各都市圏と県境をまたいで中海・宍道湖経済圏を形成し、長い歴史の中で地域の文化、伝統を育み、人、モノ、文化等の交流拠点として重要な役割を担ってきました。

鳥取県中・西部は近世以前に伯耆国と呼ばれ、西伯耆に位置する米子は古くから山陰道の出雲、備中、因幡への分岐点として繁栄してきました。戦国時代末に吉川広家が米子城を築いた頃から、現在の中心市街地の本格的なまちづくりが始まり、江戸時代初期の中村氏や加藤氏が城主であった時代に城下町としての骨格が形成されました。堀を利用した海陸交通の条件に恵まれたこともあって、明治以降「山陰の大阪」とも呼ばれるようになる等、商業の町として発展してきました。

今日までその名残をとどめる旧城下町を核として広がる市街地には、市役所、鳥取県西部総合事務所、国の合同庁舎等の官公庁をはじめとした公的機関、JR 米子駅及び JR 西日本中国統括本部山陰支社、鳥取大学医学部等の高等教育機関、同医学部附属病院等の医療機関、コンベンションセンター等の文化施設、放送局や新聞社、金融機関、大型商業施設、そのほか山陰エリアを統括するような各種企業や機関等、行政、経済、文化、教育、医療、福祉、娯楽等に関する多種多様な都市機能が集積しています。

明治 35（1902）年に山陰で最初の鉄道が米子を中心に開通して以降、今日でも JR 山陰本線、伯備線、境線の結節点として重要な役割を果たしてきており、道路では、一般国道 9 号、180 号、181 号、431 号等の主要幹線道路に加え、山陰道米子道路や中国横断自動車道岡山米子線の整備により、近年、広域交通の利便性がさらに高まっています。

また、米子空港（愛称「米子鬼太郎空港」）からは、国内線、国際線の航空路線の定期便が就航し、境港にはクルーズ客船の寄港もあり、鉄道や道路、空路、海路のいずれにおいても便利なアクセス環境にあります。鳥取・島根両県の接点として、また山陰地方の各方面への玄関口として、山陰随一の交通の要衝となっています。

コンパクトな市域に集積した都市機能、身近にある豊かな自然環境、充実した医療・介護環境、陸・海・空の優れたアクセス環境といった特徴があり、日常生活での利便性が高く、平成 27 (2015) 年に国（経済産業省）が作成した、地域の家計収支や地域の暮らしやすさを貨幣価値で示す『生活コストの「見える化」システム』において、「暮らしやすさ日本一」との評価を受けています。

産業について、平成 27 (2015) 年国勢調査における産業別就業者数は、第 1 次産業 2,451 人（産業別構成比 3.4%）、第 2 次産業 14,219 人（同 19.9%）、第 3 次産業 51,799 人（同 72.5%）となっており、平成 26 (2014) 年経済センサスにおける産業別従業者数でみると、最も多いのが「卸売業、小売業」、次いで「宿泊業、飲食サービス業」となっています。

工業については、平成 30 (2018) 年工業統計調査における製造品出荷額等でみた場合、最も多いのが「パルプ・紙・紙加工品製造業」であり、次いで「電子部品・デバイス・電子回路製造業」となっています。農業については、土壌の分布状況からおおまかに、弓ヶ浜半島の畑作地帯と南部及び淀江地区の稲作地帯とに分かれます。弓ヶ浜半島では、白ねぎ、にんじん、葉たばこ、花き等の生産が盛んに行われており、南部及び淀江地区の水田地帯では、稲作の単一経営が多く、山沿いに畑地、梨、柿、りんご等の樹園地が拓けています。漁業については、日本海的美保湾及び中海における海面漁業と日野川水系における内水面漁業が行われています。

（2）行政単位の変遷

明治 22 (1889) 年の市町村制施行によって米子町が成立し、同 29 年からは西伯郡に属していました。大正 15 年には米子駅付近の成実村の一部が米子町に編入され、昭和 2 年に市制が施行され、新生米子市に同 10 年住吉村、同 11 年に車尾村、同 13 年に加茂村・福米村・福生村が合併して人口 5 万人の都市となりました。戦後は昭和 28 (1953) 年の町村合併促進法を受けて、同年には尚徳村・



五千石村、同 29 年には弓浜部の彦名村・富益村・崎津村・夜見村・大篠津村・和田村、南部の成実村、箕蚊屋の巖村、同 31 年には春日村が米子市に編入され、人口は9万人を超えました。さらに同 43 年には大高・県村が合併して出来た伯仙町が米子市に編入され 10 万都市となりました。

一方、淀江地区では、明治 22 年に淀江宿と西原村が合併して淀江町が発足し、昭和 30 年には淀江町と宇田川村・大和村と高麗村から分離した今津が合併した淀江町が成立しました。淀江町と米子市は平成 17 (2005) 年に合併し、現在の米子市が誕生しました。なお、旧米子市と旧淀江町に挟まれた日吉津村は単独村として現在に至っています。

このような経緯により成立した米子市の合併した旧村は伝統的な集落や新興住宅地も含めた地域的なまとまりを現在も有しており、基本的には公民館の地区として引き継がれています。本計画で作成した文化財リストも公民館地区ごとに取りまとめています。

(3) 土地利用と景観

米子市の市域における都市構造は、概ね日野川による土砂の堆積によって形成された米子平野及び美保湾の砂州により形成された平地部で構成された北部地域と、秀峰大山をはじめとした中国山地に抱かれる南部地域、東部に位置し、南北を山と海に挟まれた淀江地域で構成されています。それらのほぼ中央に米子城を中心とする城下町に起源を持つ中心市街地が広がっています。

北部地域では、J R 米子駅から国道 9 号に広がる中心市街地を核として市街地が放射状に周辺へ拡大しています。市街地の北西部にある弓ヶ浜半島一帯は、境港市方面に向かって白ねぎ、にんじん、葉たばこ等の農地と集落地が帯状に延びています。

南部地域は、日野川流域に広がる平野部と大山山麓から中国山地につながる丘陵地により形成され、平野部のほとんどが水田を中心とする農地として利用されています。

淀江地域は、中央部と西部には、大山山麓から流れ出る河川が形成した沖積地が広がっており、主に水田や畑地帯、住宅地として利用されています。北には日本海を望み、南東側を占める大山山麓の大部分は森林で、一部果樹園などとして利用されています。

そして、市域を囲むように、西には汽水湖として日本で 2 番目の大きさを誇り、ラムサール条約にも登録されている中海があり、北には壮大に広がる日本海（美保湾）や白砂青松の弓ヶ浜半島、東から南にかけては、「伯耆富士」とも呼ばれる秀峰大山やそれに連なる中国山地の山塊、丘陵地等、豊かな自然景観が広がっており、市街地の景観も含めこれらはすべて、変化に富んだパノラマ景観として米子城跡やむきばんだ史跡公園から一望することができます。

また、こうした自然景観のほかに、中心市街地の加茂川・寺町周辺地区等では、米子城跡や城下町等の歴史を物語る町並みや歴史的建造物等が歴史的景観を形成しています。

(4) 交通

米子市へは J R 各線、高速道路を含む道路網、航空路等により容易にアクセスすることができます。公共交通でみると、J R 米子駅は山陰本線、伯備線、境線の結節点となっており、島根・鳥取方面からは山陰本線、岡山方面からは伯備線、境港方面からは境線を利用することができます。J R 米子駅は特急停車駅であるため、山陰本線、伯備線を経由する場合は、特急を利用することで、さらに利便性が高くなります。また J R 米子駅前には、東京、大阪、神戸、京都、広島、福岡方面を結ぶ長距離バスの発着点にもなっています。

空路では米子空港と羽田空港を約75分で結ぶ東京便が1日6便就航しており、米子空港からタクシー等を利用して、市街地へは約25分、米子空港駅からJR境線を利用して米子駅まで約30分の所要時間です。JR米子駅から淀江地域の最寄り駅である淀江駅までは、山陰本線で約15分の所要時間です。

自動車での米子市近郊へのアクセスは、鳥取方面、松江方面からは国道9号を、日野郡、西伯郡南部町・伯耆町方面からは国道180号、181号を利用するのが便利です。遠方からのアクセスは、山陰自動車道米子道（岡山方面からであれば中国横断自動車道岡山米子線を経由）を利用することになりますが、淀江IC、米子JCT、日野川東IC、米子南・中央・西ICが利用できます。

海外からのアクセスは、航空路による場合は米子空港、海路による場合は境港をターミナルとして、そこから陸路を利用することになります。

また、米子市に滞在する場合の主な宿泊地となるJR米子駅前から、山陰でも有数の温泉地である皆生温泉までは車で15分程度の距離にあります。

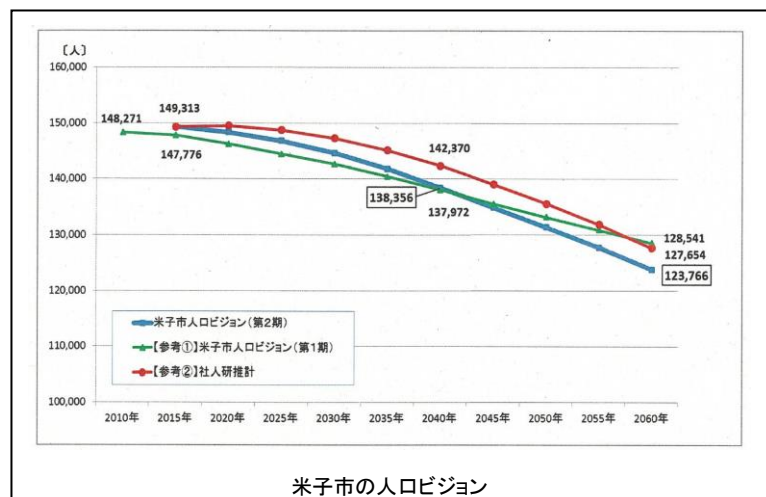
路線バスとしては、米子駅を起点に日本交通・日ノ丸自動車の各路線が便利です。また、市の施設や病院、買い物などに気軽に使える市内循環「だんだんバス」、淀江町巡回「どんぐりコロコロ」が運行されています。

（5）人口ビジョン

国勢調査によると米子市の総人口は、平成2（1990）年以降は増加が続いていましたが、平成22（2010）年の調査では減少に転じました。直近の令和2（2020）年の調査では、5年前と比較して約2,000人減少し、147,317人となっています。

年齢3区分別の人口の推移をみると、年少人口は減少する一方で、老年人口は増加を続けており、少子高齢化が着実に進行している状況です。生産年齢人口については、1980年代から9万人台で推移してきましたが、平成22（2010）年には9万人を割り込み、平成27年ではさらに減少し86,473人となりました。

将来人口の推計は、2040年において138,356人、2060年において123,766人となっています。この結果を本市の人口の将来展望として掲げ、今後人口が減少していく状況の中で、いかに本市の活力を維持していくのが課題となっています。



（6）文化観光資源

米子市は、紀元前から人々の営みが続く悠久の歴史と北に日本海、東に国立公園の大山、西にラムサール条約湿地である中海、南に中国山地から連なる山並み等、豊かな自然に囲まれたすぐれた立地にある都市であり、市内にはさまざまな歴史文化遺産が、観光資源として存在しています。



天の真名井

これらの歴史文化遺産や米子市の歴史文化等に関する資料を収蔵、調査研究等を行うとともに、展示・公開を行っている文化施設として、米子市の歴史全般に係る資料の収蔵展示や調査研究を行う米子市立山陰歴史館、埋蔵文化財の調査研究等を行う米子市埋蔵文化財センター、福市遺跡、青木遺跡の遺物を中心とした収蔵展示を行う米子市福市考古資料館、淀江地域の歴史民俗資料の収蔵展示や史跡上淀廃寺跡のガイダンス機能を持つ上淀白鳳の丘展示館があります。



上淀白鳳の丘展示館

また、本市を観光面からみると、大きく3つのエリアがあります。皆生温泉エリアは、白砂青松の風景と豊富な温泉資源を有する山陰最大の温泉地です。米子市街地の郊外にあり、国立公園大山を仰ぎ日本海に寄り添うすぐれたロケーションにあって、旅館・ホテル・日帰り温浴施設等の宿泊・レジャー施設が集積しており、四季を通じてスポーツやレジャーに華やぐ観光リゾート地のにぎわいをみせています。日本におけるトリアスロン発祥の地でもあります。

淀江エリアは、豊かな緑と名水に恵まれ、史跡の宝庫でもあります。弥生時代の集落跡や古墳時代の古墳、白鳳時代の寺院跡等、古代の史跡が集中するとともに「本宮の泉」、「天の真名井」といった大山山麓の伏流水が湧き出る名水の里としても知られており、標高 751.4mの孝霊山を中心に大山山麓の山々を仰ぐ、水と緑の自然にあふれています。

そして、旧城下町エリア（中心市街地）は、JR米子駅からも近く、米子城跡や近世から近代にかけての歴史を感じさせる古い町並み等を有し、ラムサール条約湿地である中海に接する新たな観光地として注目されています。



米子市埋蔵文化財センター



米子市福市考古資料館



上淀白鳳の丘展示館



加茂川・中海遊覧

3 歴史的背景

米子市では旧石器時代から人々の活動が確認でき、縄文・弥生時代の大規模集落跡や古墳時代の遺跡も数多く発見されています。中世には各地に豪族による城館が築かれ、近世には米子城の城下町として繁栄し、その城下町の商人によって近代から現代の「商都米子」の礎が築かれました。

(1) 旧石器時代

市域では、旧石器時代の遺構は現在のところ確認されていません。ただし、大山山麓や周辺の台地上では遺物が出土しています。長者原台地の諏訪西山ノ後遺跡では、ナイフ型石器がローム層中から出土しています。また泉中峰遺跡、原畑遺跡でもナイフ形石器が出土していますが、大山山麓北部で確認されているようなキャンプサイト的な遺構としての石器群は、今のところみつかっていないため、旧石器時代の様相については未だに不明瞭です。

(2) 縄文時代

縄文時代の初頭より人々の活動が見られますが、草創期に遡る遺跡は少なく、陰田第6遺跡等では尖頭器が、奈喜良遺跡等ではサヌカイト製の有舌尖頭器が出土しています。

本格的に遺跡が確認されるのは、早期以降です。大山山麓に位置する上福万遺跡は、早期の大規模な遺跡で集石遺構や土坑が多数みつかっています。また、押型文土器が多数出土し、さらに南九州と類似する土器が出土しており、広域で交流していたことがわかります。

早期末～前期以降は、安定して集落が形成され、中海や淀江潟の入海に沿った低地と大山の北・西麓の丘陵上に遺跡が集中します。中海沿岸は、中国地方を代表する縄文遺跡の密集地で陰田遺跡群や目久美遺跡等があります。前期は縄文海進期で、中海沿岸地域と淀江潟は豊富な水産資源を利用した漁労生活と背後の丘陵の狩猟生活に支えられ、中海沿岸の目久美遺跡や淀江平野の富繁渡り上り遺跡・鮒が口遺跡などは、入海沿いに立地する遺跡として知られています。

中期には遺跡数が減少し、海岸部では新たな遺跡はみられません。後期・晩期になると、再び遺跡数が増加します。淀江平野では沿岸で漁労を営んだ河原田A遺跡・井手勝遺跡が知られています。台地・丘陵部の妻木晩田遺跡、青木遺跡などでは何百基もの陥穴が確認されており、狩猟が盛んに行われたことがわかります。



井手勝遺跡の漆塗櫛

(3) 弥生時代

縄文時代晩期末から弥生時代に入ると、海退が進むことで中海沿岸は低湿地化し、農耕に適した土地が広がっていたと推測されます。こうした土地に水田が開かれ、周辺の微高地には集落が形成されます。弥生時代前期の代表的な遺跡としては、目久美遺跡があります。前期から中期にかけての水田が検出され、農耕具等の木製品も多く出土しています。淀江の今津岸の上遺跡では集落



目久美遺跡の弥生水田

を囲む環濠が確認されています。

弥生時代中期後半になると、丘陵上に集落の形成が始まります。中でも青木遺跡は中期後半から後期にかけて長期間存続した集落です。この他、米子市と大山町にまたがる妻木晩田遺跡では地域の拠点集落が丘陵上に出現します。陰田から新山にかけての丘陵部においても、中期後半から後期にかけて集落が営まれ、古墳時代前期へ続いていきます。丘陵部の大規模集落の出現には争乱や人口増等の社会的背景が考えられます。この時期の淀江潟周辺で暮らす弥生人の社会をパノラマ風に描いた絵画土器が、角田遺跡から出土して注目されています。

後期になると、中期から継続する拠点集落遺跡の他に、新たな集落遺跡が出現します。竪穴住居とそれに伴う数棟の掘立柱建物が集落内に散在する形で構成される小規模な集落が見取れ、これら後期に丘陵上に出現する集落遺跡からは、この時期の社会に大きな変動があったことが窺えます。また、妻木晩田遺跡などで四隅突出型墳丘墓が出現し、弥生から古墳時代への墓制の移行期と推測されています。尾高浅山遺跡では弥生時代後期前葉から始まる三重の環濠集落や、後期中葉から末の四隅突出型墳丘墓が発見され、福市遺跡では弥生後期、古墳時代の集落・土壙墓群が確認されています。

海浜砂丘域では、弥生時代の海退により弓ヶ浜砂州が出現し、古中海湾は潟湖となりました。錦町第1遺跡では弥生前～後期の土器が出土しており、博労町遺跡等でも弥生時代の遺跡が確認されていることから、前述のクロスナが発達した内浜砂丘域において集落が形成され始めたのは、この頃からです。

(4) 古墳時代

この時期の米子平野の集落遺跡は主に台地や丘陵の上に分布しており、福市遺跡や青木遺跡のように弥生時代後期から継続して営まれるもののほか、中期から形成される集落もあります。近年、砂丘域の博労町遺跡においても集落が検出されており、海浜部の拠点集落と考えられます。

米子平野の最古の古墳は日原6号墳で、弥生墓制の伝統を継承している方形墳です。次いで円墳の石州府29号墳からは中国製獣帯鏡が出土しています。加茂川流域の陰田・新山遺跡群でも古墳の造営が始まりますが、いずれも小円墳であるのに対して、弥生時代に拠点集落であった妻木晩田遺跡では、ヤマト王権による全国支配の象徴である前方後円墳が築造され、大型方墳・円墳を含む晩田山古墳群が形成されます。さらに淀江地域では、大型円墳の上ノ山古墳に続いて中期後葉～後期の50～60mクラスの前方向後円墳が集



四隅突出型墳丘墓群
(国史跡 妻木晩田遺跡)



角田遺跡の絵画土器 (県保護文化財)



博労町遺跡出土の多量の土器



日原6号墳

中する向山古墳群が出現し、石馬谷古墳には石馬が樹立されていました。西伯耆最大の前方後円墳は、南部町の三崎殿山古墳（108m）が前期末の築造です。岩屋古墳（向山1号墳）は出雲地方の影響を受けた巨大な石棺式石室を持つ最後の前方後円墳です。

後期になると古墳数は爆発的に増加し、百塚古墳群・石州府古墳群・宗像古墳群、陰田古墳群などの群集墳が営まれます。米子平野では横穴墓も多くみられ、日野川左岸、法勝寺川流域に集中しています。代表的なものが陰田横穴墓群で、古墳時代後期における鳥取県内最大の横穴墓群です。初期の横穴墓は後背墳丘を伴う例が多く、箱式石棺、礫床・須恵器床を備え、横穴式石室を主体部とする古墳との関係をうかがわせ、こうした様相は県境を越えて出雲東部にも類例が見られます。

（5）古代

奈良時代以降の律令制において、伯耆国には河村・久米・八橋・汗入・会見・日野郡の6郡が置かれました。旧米子市域は会見郡の一部、旧淀江町域は汗入郡の一部に相当します。さらに会見郡の下には12郷、汗入郡には6郷が置かれていましたが、位置のわからないものもあります。地名などから会見郡では、日下・安曇・美濃・蚊屋・千太・会見・半生郷、汗入郡では新井郷が相当すると考えられます。

会見郡家（郡衙）については、近年の発掘調査により、伯耆町坂長地区に所在する可能性が高まっています。この地区では長者屋敷遺跡などで奈良時代の官衙と推定される大型建物跡群、坂長第6遺跡では鍛冶工房が発見されています。この周辺には飛鳥時代後期の東面する法起寺式伽藍配置をとる寺院で、石製鷲尾を持つ大寺廃寺や、塔心礎が残存する坂中廃寺の古代寺院も知られています。今在家下井ノ上遺跡では、掘立柱建物跡や墨書土器、転用硯等が出土していることから、会見郡家の下部組織として、蚊屋郷の郷家である可能性が指摘されています。また、博労町遺跡では溝に囲まれた掘立柱建物群や、鍛冶関連遺構と共に、腰帯具、「厨」墨書土器などが出土しており、半生郷の官衙関連施設の可能性があります。陰田・吉谷周辺域は出雲、伯耆の国境に位置しているため古くから往来の要地であり、7世紀後半以降になると官衙との関連性の高い遺跡が出現します。この時期の集落遺跡として、福市遺跡や青木遺跡が知られています。

淀江町福岡には7世紀末に金堂の東側に南北に3塔が配置された独特の伽藍配置を持つ上淀廃寺が創建されます。廃寺からは国内最古級の彩色仏教壁画や塑像片が出土し、また「癸未年(683年)」と干支年号が刻まれた瓦が出土し、考古学・美術史上も注目されています。

全国的に施行された条里地割は、淀江の条里でよく旧状をとどめていましたが、圃場整備により条里区画は姿を消しています。古代山陰道については、条里に沿って汗入郡の上淀廃寺西側から会見郡の大寺廃寺、長者屋敷遺跡を通して、伯耆町岩屋



向山古墳群（国史跡）



陰田横穴墓群



上淀廃寺跡（国史跡）

谷から南部町天万を抜ける南側のルート、もしくは米子市諏訪から古市を抜ける北側のルートが想定されています。

延喜式神名帳の伯耆国六座のうち会見郡には胸形神・大神山神の記載があり、宗形神社と大神山神社がこれに当たります。大神山神は承和4（837）年に従五位下、斉衡3（856）年に正五位下、宗形神は同年従五位上の神階が贈られています。

（6）中世

古代末～中世の在地領主として紀成盛が知られています。承安2（1172）年大山寺に奉納した鉄製厨子銘文に「伯州会東郡地主、本系紀納言」とある成盛は、会見郡東辺の古代以来の貴族が土着、武士化したものと思われます。『大山寺縁起』には、紀氏と伯耆東部に力を持つ在庁官人である小鴨氏の争いの記述があります。この他、伯耆の日野氏や藤原氏、金持氏などは、荘園内に勢力をもった有力武士であったと思われます。この頃、末法思想の影響で各地に経塚がつくられ、長砂経塚・中山経塚には法華経が埋納されました。

平氏政権から鎌倉幕府と続く武士支配に対して倒幕による天皇親政を目指した後醍醐天皇の隠岐配流・脱出に関わる足跡は、船上山をはじめ伯耆国に多く残っています。米子市にも瓊子内親王ゆかりの安養寺や後醍醐天皇直筆綸旨を含む相見家文書などが伝わっています。建武4（1337）年、山名時氏が伯耆国守護に任命され、以後、山名氏の子孫が伯耆国を支配します。『応仁記』によれば、かつての地頭である赤松・福頼・小鴨氏等は山名氏の下で伯耆衆と呼ばれています。南北朝以降、山名氏支配下の国人が中小の城館を構え、城下に家臣を集住させます。その後、中世後期の動乱期になると、国境の交通要衝や山陰道沿いの要地を中心に法勝寺城、柏尾小鷹城、鎌倉城などが築造され、市域にも石井要害・橋本要害・新山要害・戸上山城跡・飯山城跡・尾高城跡などの城が築かれます。西伯耆の領国支配をめぐる山名氏、尼子氏、毛利氏はこれら諸城を舞台に激しい戦いを繰り返しました。このうち尾高城は西伯耆の要の城でした。永正年間（1504～20）には行松氏が尾高城を居城としていましたが、尼子、毛利方と城主が変わり、永禄7（1565）年には杉原氏、天正10（1582）年には吉田氏が城主となり、慶長6（1601）年、関ヶ原戦後には伯耆一国の領主となった中村一忠が一時入城しました。



鉄製厨子（重要文化財）



長砂経塚出土品（市有形文化財）



桃形兜（市有形文化財）



尾高城跡（市史跡）

戦国末期になると、山陰一帯は毛利氏の支配下に入り、天正19(1591)年吉川広家は、東出雲・隠岐・西伯耆(八橋城と汗入・会見・日野)など12万石を分与されました。この年から広家は中海を望む水運の適地である米子に新しい城地を選んで湊山山頂の城の築造にかかりましたが、翌年から始まった文禄・慶長の役により、朝鮮に出陣し、米子城を完成させることは出来ないまま、慶長5年(1600)、関ヶ原戦の後、岩国に転封となりました。

中世集落遺跡は、現在のところ確認されていませんが、砂の移動が停滞した砂丘では盛んに農業生産活動が行われ、博労町遺跡、錦町第1遺跡では中世の畠跡が確認されています。また中世墓としては、13~14世紀代の日下古墓や15~16世紀代の別所中原地下式横穴などがあります。

(7) 近世

慶長5(1600)年に中村一忠が伯耆18万石の領主となりますが、幼少であったため家老横田内膳の下、築城途中だった米子城を完成させ、慶長7(1602)年頃に入城したと考えられます。中村氏は米子騒動(横田騒動)を経て一代で改易となり、慶長15(1610)年に加藤貞泰が6万石で入府します。元和3(1617)年には因幡・伯耆二国の太守として池田光政が鳥取藩主となると、一族である池田由之が城主となります。寛永9(1632)年岡山から国替えとなった池田光仲が鳥取城に入ると、筆頭家老荒尾成利が米子城預かりとなり、米子の町の自分手政治を行うことが許され、以後幕末まで米子城下町は荒尾氏により統治されました。

荒尾氏の時代になっても大規模な都市改造は行われていないことから、吉川氏、中村氏の城下町時代の町割りが踏襲されたとみられます。米子組土と呼ばれる鳥取藩土と荒尾家家臣が住む城下の武家屋敷は、小原家長屋門以外は現存しませんが、近年、米子城跡遺跡群として発掘調査が行われて城下町の解明が進んでいます。

一方、外堀(加茂川)沿いには、江戸時代以降の商家の建物が残っており、廻船問屋を営んだ後藤家住宅などが当時の威容を見せ、後の商都米子への萌芽を感じさせます。

城下町の外、南部地区は古くから開発されていましたが、浜の目と呼ばれた砂丘地である弓ヶ浜地域は、江戸時代になってから形成された村が多くあります。これは鳥取藩郡奉行であった米村所平が日野川から水を引き、60年の歳月をかけた米川用水が宝暦9(1759)



博労町遺跡の中世の畠跡



米子城跡(国史跡)



後藤家住宅(重要文化財)



加茂川白壁土蔵群



芋代官碑(市民俗文化財)

年に境水道まで開通したことがきっかけとなり、新田開発や綿栽培が盛んになったことによるものです。「伯州綿」というブランドにまで育った弓ヶ浜半島産の綿は、江戸時代から明治時代にかけて主要な交易品となり、境港から北前船にのって日本海を往来しました。また伯州綿栽培の発展は、綿を原料とする弓浜緋や倉吉緋の発展にも大いに寄与することにもなります。それでも天災による不作は容赦なく百姓の暮らしを脅かします。飢えに苦しむ人々を救ったサツマイモを導入した石見国大森代官を祀る芋代官碑が弓ヶ浜半島にはいくつも見られます。

湊を持つ淀江には年貢米を納める藩倉が置かれていましたが、黒船来航をきっかけに鳥取藩も海防のために主要港湾に海岸砲台を建設し、西伯耆では境台場・淀江台場が残っています。やがて幕府の権威が揺らぎ、260年続いた江戸時代の終焉とともに、鳥取藩による武家支配も終わりを告げました。



鳥取藩淀江台場跡（国史跡）

（8）近代

明治新政府は、版籍奉還・廃藩置県を断行して隠岐、因幡、伯耆は鳥取県となり、元藩士河田景与が権令(のちに県令)に任命され、米子町西町には、汗入、会見、日野三郡の事務を取り扱うため、鳥取県支庁がおかれしました。鳥取県は、一時島根県に併合されましたが、再置運動の結果、明治14(1881)年には、隠岐を島根県に残し、因幡と伯耆が現在の鳥取県となりました。明治22(1889)年の市町村制実施により、現在の米子市にあたる地域には、会見郡米子町と汗入郡淀江町の2町と22か村が成立し、明治29(1896)年に会見郡と汗入郡で西伯郡となりました。

徴兵令や学制といった社会制度の変革とともに、西洋の技術を取り入れた近代的な製糸工場が開業するなど殖産興業が進められ、米子商工会が明治24(1891)年に県下で最も早く結成されるなど、江戸時代以来の商都としての発展が続き、「山陰の大阪」と呼ばれるまでに繁栄を見せています。こうした商工業の発展を支えるインフラ整備として明治42(1909)年、山陰電気株式会社により日野川上流に建設された水力発電所から電気が送られ、米子町の中心市街地で点灯が実現しました。

当時は米子港を起点とした海運が盛んで、北陸はもとより、下関廻りで京阪神地方との交易も行われました。港周辺には、倉庫や事務所が立ち並び、灘町辺りは大変なにぎわいを見せていました。山陰最初の鉄道が起工されたのは境からで、明治35(1902)年には、境—米子—御来屋間に鉄道が開通しています。その後、東西に鉄道が伸び、貨物輸送が増大することで、米子の産業の発展に大きく貢献しました。明治45(1912)年には、山陰本線(京都—出雲今市)の開通を記念し、山陰鉄道開通記念全国特産品博覧会が米子で開催されました。繁華街が港に近い灘町、立町から、駅に近い道笑町、法勝寺町へと移り、海上交通から陸上交通主体へと変化していきました。

大正13(1924)年には、山陰地方初の電車(法勝寺鉄道)が米子—法勝寺間に開通し、翌年からは米子駅から皆生に至る米子電車軌道が順次開通しました。大正10(1921)年からは皆生温泉の開発にも積極的に取り組み、山陰の新しい観光地として繁栄するようになりました。

また、上水道の建設にも着手し、日野川の伏流水を利用することで大正15(1926)年に旧米子水源地から一般給水を開始しました。この時のポンプ室や水管橋が近代化遺産として残っています。

昭和2(1927)年には市制が施行され、戸数6,843、人口31,144人の米子市が誕生しました。当時

は、世界的な不景気でしたが、合併を進めながら市政は着実に充実・整備され、昭和 5（1930）年に建設された鉄筋コンクリート 3 階建の米子市役所（旧館）は市民の誇りでした。



米子市役所旧館（市有形文化財）



旧海軍美保航空隊飛行機用掩体（市史跡）

大正時代に陸軍飛行隊の演習場であった三柳飛行場は、1937(昭和 12)年に国際飛行場となり、東京・大阪と朝鮮・大陸を結ぶ中継基地となり、満州華北への定期便が発着しました。大篠津では海軍航空基地の建設が始まります。やがて、太平洋戦争が始まると、経済は急激に悪化し、人々の生活は厳しく統制されるようになりました。

（9）現代

昭和 20（1945）年、第 2 次世界大戦が終わると戦後復興が始まりました。米子の町でも衣食住にかかわるさまざまな物資が不足し、深刻な食糧不足のため法勝寺町・紺屋町川筋・朝日町などにはヤミ市ができ、物価は著しく高騰しました。昭和 27（1952）年、サンフランシスコ講和条約が成立して、朝鮮戦争特需を経て日本経済は復興をとげ、「もはや戦後ではない」と言われました。

美保基地も終戦後直ちに占領軍に接收されて連合軍が進駐、昭和 33（1958）年まで駐留は続きました。その間に婦人解放などの改革も進み、女性参政権を認めた戦後初の国政選挙では、米子の助産師・田中たつが当選しています。新たに公布・施行された日本国憲法の下での初の市長、町長選挙では、文人市長として親しまれ、後に『米子界限』を書いた野坂寛治が選ばれています。建物強制疎開が行われた米子市では、街並みの復興も急がれ、都市再建整備のため、東町から新加茂川へ続いていた米子城の外堀が埋め立てられて、道路になっていきました。

農地改革や教育制度改革も進められ、小中学校の 6・3 制や、男女共学等が進められました。さらに、終戦直前に開校した官立米子医学専門学校は、現在の鳥取大学医学部に引き継がれています。

国から町村合併促進法が出されたのを受けて、米子市は尚徳・五千石・彦名・崎津・大篠津・和田・富益・夜見・成実・巖・春日の 11 村と、淀江町は大和・宇田川・高麗村今津の 2 村 1 地域と合併しました。伯仙町との合併は、昭和 43（1968）年に出された新法によるものです。

米子は鉄道の町といわれてきました。昭和 25（1950）年に米子鉄道管理局が開設されると、所管は鳥取・島根・山口 3 県という広大なものでした。やがて蒸気機関車に代わるディーゼル機関車が登場し、複線化、電化と鉄道は発展してきましたが、一方で道路網の整備とモータリゼーションも着々と進んでいきます。昭和 42（1967）年には法勝寺電車が廃止され、バス路線の拡充や長距離急行バス・定期観光バスの運行も相次ぎます。昭和 29（1954）年、美保飛行場の利用が許可され、民間航

空が再開され、アメリカ陸軍より返還された航空自衛隊美保基地が開設、民間空港としても米子の空の玄関として重要な役割を果たしています。

1950（昭和 25）年、現在でいうスーパーマーケットが開店すると、既存の小売業者との競合が激しくなり、商店街では全国に先駆け土曜夜市が始まり、大いに賑わいました。そして百貨店も続々開店して、米子の商戦は一層激しさを増していきました。しかし、車社会の到来により鉄道利用者が減少し、駅前通りから元町、本通りへ人の流れが変わったのも束の間、昭和 45（1970）年頃から大型駐車場を完備した郊外型ショッピングセンターの出現で旧市内の人口の減少と、郊外人口が増加するドーナツ化現象が顕著になっていきました。同時に減反政策により中海干拓に伴う淡水化事業が中止されたことなどにより、産業別では第 1 次産業の減少が起こります。

昭和 33（1958）年、全市民を巻き込む募金運動の後押しを受けて、文化施設の乏しかった米子に待望の公会堂が誕生します。その後、米子市美術館・児童文化センター・東山運動公園、淀江町には運動広場・町民体育館など、次々と文化体育施設がオープンしました。そして戦後 40 年を迎えた昭和 60（1985）年、鳥取県を会場に第 40 回国民体育大会「わかとり国体」が開幕し、淀江町はソフトボール競技大会の会場となります。この頃淀江町では、天の真名井が環境庁名水百選に選定、淀江傘の復活、伯耆古代の丘のオープンなど、史跡と名水のまち・淀江を象徴する取り組みが推進されました。中海では米子水鳥公園が開園し、国際的に重要な湿地としてラムサール条約に登録されました。

2000（平成 12）年 10 月 6 日に発生した鳥取県西部地震は、淀江町震度 6 弱、米子市 5 強を記録し、古くから地震のない地とされていた米子市民に衝撃を与えました。戦後、日本の復興とともに成長を続けてきた米子でしたが、長引く不況に国も地方も厳しい財政状況にあります。その中で、市町村合併特例法の改正を受けて、2005（平成 17）年 3 月 31 日に米子市と淀江町が合併し、人口 149,803 人、面積 132.21 km²の新しい「米子市」が誕生して今日に至っています。



D51 形蒸気機関車（市有形文化財）



米子市公会堂（昭和 33 年）